

とかす力（八木重吉の詩を愛好する会会報）

（事務局及び会報）〒270-1406 千葉県白井市中 205 小林正継

Eメール kmat27aiko@gmail.com

携帯電話 09061674553

☆ 第 32 号

☆2024年（令和6年）

12月25日 発行

★2024年の茶の花忌報告

2024年の茶の花忌は、諸事情を踏まえ、〈愛好者たちで作る茶の花忌〉の理念を土台に据え、私（小林）が事務局としてリードして来た「八木重吉の詩を愛好する会」が主催者となって、新しいやり方で取り組みました。全員が一か所に集まって講演や演奏を聞くという従来のやり方を変え、いくつかの活動に分散し、それぞれに愛好会のメンバーが付いてリードしながら進めていきました。具体的には以下のような進行になりました。

まず墓前礼拝だけは八木家の墓地に全員集まって

13:00～13:30 重吉の愛唱歌讃美と小林の感話【柏の詩碑〈原っぱ〉について】。内容は以下です。

1 宗教を越えて愛される重吉の詩

当初命日の記念会は仏式でしたが、八木重吉がクリスチャンだった故に、記念館が出来てからは、キリスト教式の礼拝として行っていますが、重吉の求道がキリスト教と詩を通して深められていく中で、ふるさとの神仏混交の世界も包含した重吉独自の世界へ進み、宗教を越えて人の心に訴える詩の作品が生み出されました。詩碑に選ばれた詩の多くがその特徴をもっています。私の母校、柏の東葛飾高校にある詩碑「原っぱ」もそうです。



2 柏の詩碑「原っぱ」

ずいぶん/ひろい原っぱだ/いっぼんのみちを/むしようにあるいてゆくと/ころろが/
うつくしくなつて/ひとりごとをいふのがうれしくなる

この「原っぱ」は、愛を歌った詩『愛』『ねがひ』の2篇と一緒に候補に出して東葛飾高校生徒職員に選んでもらった詩です。愛の歌も素晴らしいですが、柏や東葛飾高校という学校の特色は出ません。この学校の卒業生としての直観で、「原っぱ」が選ばれる気がしました。実はこの詩を候補に挙げたのは私です。クリスチャンだけでなく、多くの人に長く訴える詩として良いと思ったからです。それに平凡に見えるけど深みがある詩だからです。

「原っぱ」は雑誌に投稿した詩ですが、重吉詩稿のなかにもあり、そこでは「のほら」となっています。重吉が投稿に当たって推敲した結果、原っぱの響きを選んだのです。私もそうですが、農村出身者は、原っぱの方が自然なのです。それに登美子夫人も「琴はずかに」の中で学校のそばのこの原っぱを、「3万坪の原っぱ」と表現しています。

いっぼんのみちとは、山林を切り開いて新しく作った道（流山街道）です。ただし、今で言えば畑道が少し広がったような道です。並行して走る道は無い、一本しかない道です。左右は草だらけ、自然の草木しかない道です。北西に向かう道なので、快晴の夕方ならば左前方にきれいな夕焼が見える時があります。その場面に遭遇した時の高揚感を詠ったのが御影の「夕焼」の詩です。〈原っぱ〉を作ったこの日はおそらく、うす曇りだったと思われます。そして逆側の右奥の方を見れば筑波の峰が望めるはずですが、この道を普通にまっすぐ歩いたら、道の前方の視界には筑波山は入らないと思います。夕日も無い、筑波山も見えない開けた景色は、高低の起伏がある相原や御影と比べたら単調です。しかし視界が広く開けた原っぱそれ自体が、重吉には魅力的だったのだと思います。広大な原っぱの中を無心に歩いて行くと自ずと心が澄んできて独り言を言う重吉、その浮き浮きした感動を「ころろがうつくしくなつて」と素直に表現しています。もし秋の虫が鳴き始める夕暮れなら、もの悲しさを感じ、重吉の特徴である「かなしみ」の気持ちが湧いたかもしれません。茅ヶ崎の「蟲」の詩はそのような時に詠われた詩です。しかしこの時はまだ明るさが勝っている午後の時だと思えます。独りであるいは愛する家族と一緒に散歩を楽しんだ幸福な姿がこの詩には出ています。ひとすじに、厳しい孤独な求道の道を歩んでいた重吉が、雄大な原っぱの自然にふと緊張が解けた一瞬だったかもしれません。

「原っぱ」は、深みを秘めつつも、宗教的な感じはなく、柏の当時の景色も伝えてくれる詩なので、自然な感じで、地域の人々一般に長く愛されていくと思えます。また歩道に面していて、季節ごとに周囲の花木も変化し、いつでも見られる身近な詩碑です。訪れたことが無い人は是非立ち寄りみてください。

13:00～15:30 生家の庭を中心にいくつかの場所に分かれての活動です。

6つの企画ごとの内容は以下でした。

1) 近所の重吉関係史跡散策 13:40～14:30



町田市民文学館の神林由貴子さんが、丁寧な散策資料を配布して下さり、1時間ぐらいかけて近くの重吉関係の神社仏閣史跡等を巡りました。近くにあってもなかなか行けなかった裏山の江柄神社や大戸観音堂、そして境川など、重吉が幼少年期に遊び回った場所を訪ねることができ、いつもはできない活動が出来ました。

←江柄神社

2) 重吉詩のライブ演奏 (ヨーエンさん) 13:40～14:00と14:40～15:00の2回

きれいな曲目一覧が配布され、ヨーエンさんが、昨年に続き2回目の茶の花忌でのライブ演奏、生家の庭にいた人々が全員聴いていました。昭和歌謡も魅力的に歌い上げる彼女は、重吉の詩に感動して重吉詩のライブ演奏を加えるようになっていろいろなところで活躍しています。



3) 詩の朗読会 14:10～14:30 15:10～15:30の2回

朗読用に編集したミニ詩集を5分位の時間で読み上げ、その後参加者で15分位自由に感想を言い合う時間となりました。重吉の詩の鑑賞を通して愛好者同士の交流にもなり、新しい形の方法になったかと思えます。



4) 本や写真、絵葉書、CD等の展示と頒布 13:30～15:30 随時



愛好会として所有している本や、愛好者の論文や絵葉書など展示し、欲しい人には頒布(販売)しました。無料で提供できる物は受付の際に資料として皆さんに配布しました。単純に重吉の詩集が欲しかったという人もいて、愛好者の原点は重吉の詩なので、詩集は準備すべきだったと反省した点です。

5) 記念館見学 随時

各自随時見学。担当者が時々見回りましたが、貴重な資料の展示なので専門の警備員を生家の方で付けてくれていました。記念館は見学の中心の場所ですが、土蔵を改修して展示場所としたので、すでに展示をしきれなくなっていて、将来に向けては資料保管の場所を考えて行かなくてはなりません。

6) 墓参り 随時

参加者が自由に墓参り。今年は花入れを多くして華やかに見えるように工夫してみました。ここで墓前礼拝を持って来ていますが、敷地はお茶の木に囲まれて風情はありますが、多くの人が集うにはやはり狭すぎます。また生家の庭と墓の間に町田街道が走っているので、渡るのに中止しないといけません。安全のために自主的に奉仕して下さっている地域の方(南大沢交通安全協会)がいて感謝でした。

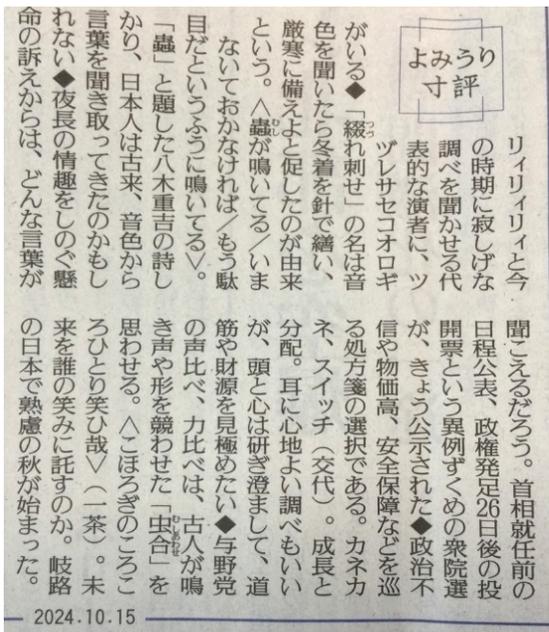
天気予報があまりよくなく、雨天の場合は中止も考えていたので心配されましたが、なんとか雨にはならず無事終了しました。愛好会のスタッフを入れて全体で60人位の訪問者が来たかと思えます。活動を分けた事で今まで出来なかった活動を出来ましたが、人数が分散したことで、一つにまとまっただけの賑やかな雰囲気は寂しかったかもしれません。提出してくれたアンケートを見ると、否定的な感想はありませんでしたが、今までのやり方でも今回のやり方でも、どちらでも良いという感想でした。愛好会のスタッフが初めての主催、そして各担当の責任を持つという事で緊張感がありました。好天の時だったらもう少し訪問客が多かったかもしれません。今年のやり方が良いという事では無く、試行錯誤しながら、さらに多くのスタッフを増やして、出来るだけ負担感を減らして、また訪問客と一体になって楽しく交流しながら、八木重吉とその詩を、いろいろな角度から味わう催しを作り上げて行こうと考えています。



★ 新聞記事の紹介

・2024年10月15日の読売新聞夕刊より

(金野実加枝さんより提供)



★花忌で頒布した書籍等

- 『八木重吉英文日記』 2000円
(1915年鎌倉師範学校2~3年生の時、英語学習のために英語で書いた日記、2018年12月、生家の小屋から発見され、生家の依頼で小林が翻訳)
- 『八木重吉を慕いて』 1000円
(八木重吉の詩を愛好する会〈1985年結成〉の歩みを記録したもの。)
- ハガキ写真 1枚 50円
 - ・八木重吉の詩碑 (小林作)
 - ・八木重吉の詩碑の詩 (小林作)
 - ・詩画 (小澤則夫作、数種類あり)
 - ・8枚セット写真集 300円 (1990年愛好会作成)
- 論文の展示
『八木重吉の聖書』(新教出版社の月刊誌「福音と世界」の連載論文。書込みしたメモの研究、(今高義也作)「御影時代の詩とタゴールとの関係」(河村梢作)「御影時代の重吉の住居の場所の研究」(河村梢作)

・2024年11月7日の読売新聞夕刊「我がまち再発見」

(青木幸雄さんより提供)

アウトドア体験隊 千葉・柏編 下

旧街道の安全見守る黒鳥居

我がまち再発見

【編集後記】
「路上ライブの聖地」として知られる柏駅前を、10月24日の「千葉・柏編②」でご紹介しました。ここで育ったミュージシャンの一人に奥平さんがあります。アニメ映画の主題歌になった「ガーネット」は、青春の甘酸っぱさが詰まった名曲ですね。公式サイトには、まだ無名だった20年ほど前、キーボード一つで聖地に挑んだ姿が描かれています。

波谷の路上を経験後、「柏駅前が人が集まったら本物」と言われて恐る恐る向かうと、プロ並みの演奏者が競い合う光景に圧倒されたそう。ただ、足早に人が行き交う都心より、静かな街が向いていたのでしょう。驚異的な集客が評判になり、後のメジャーデビューにつながりました。

路上ライブが登録制となった現在、柏市の関連サイトで演奏者が紹介されています。見てみると、女子大生から若い中年男性まで多彩です。耳の肥えた柏住民のハートを誰がつかむのか、現地を確かめてみたいと思います。(航)

旧水戸街道が通る柏市は、古くから交通の要衝だった。この街の歴史や文化が薫るスポットを中心に歩いてみよう。

柏駅西口からスタート。駅前広場のデッキの壁面には、地元の名作家・松本節太郎さんによる「下総玩具」が飾られている。粘土を手で成形したお面が並び、ユニークな色合いが目を引く。一つひとつに手作りの温かみを感じられ、眺めているとほっこりする。

南西に向かうと「旭町香取神社」が見える。明治政府が開発した周辺の土地の総鎮守として1889年に建てられ、1964年には大阪府から大鳥神社も分祀された。毎年11月には、西の市が開かれ、商売繁盛を願う縁起物の熊手を求めて多くの参拝客でにぎわう。境内には「かしわ七福神めぐり」の一つ、恵比寿の像も置かれている。地元有志が2009年から活動を始め、市内7か所の神社で七福神を祭るようになった。順に巡るのも楽しいだろう。

北東に進むと、「原っぱ」と刻まれた八木重吉の詩碑が目に入った。八木は1925年から高校で英語教師として勤めながら、自然をテーマに詩を残した。29歳の短命でこの世を去ったが、没後に評価が高まり、愛され続けている。「ずいぶん ひろい原っぱだ」で始まる詩は、田舎道を歩きながら心が洗われていくさまを表している。住宅やビルが立ち並ぶこの地域も、当時は田園風景が広がっていたに違いない。

線路を渡って駅の東口側に出ると、すぐに諏訪神社が見える。建御名方神を祭り、家内安全や交通安全などに利益があるとされる。珍しい黒の鳥居をくぐると、ハシビロコウなどの動物が描かれた絵馬やお守りが並ぶ。神社とハシビロコウ。ちょっと意外な組み合わせかも。

動物を取り上げたのは、権禰官の友野京さんのアイデアだ。フクロウを飼育するなど動物好きの友野さんは中でもハシビロコウの大ファン。2018年からお守りに描くようになった。次第に評判を呼び、全国から買い求める人が訪れるようになったという。現在はカメやフクロウ、カピバラなどのデザインも登場。「好きで始めたことでみんなが幸せな気分になったなら、こちらもうれし」と話す。

旧水戸街道を出て、しばしば南へ歩くと、駅方面に向かう道路との交差点に「明治天皇柏御小体所」の石碑がある。江戸時代の名士の邸宅があった場所、明治天皇も休憩に立ち寄ったという。邸宅は「摘翠軒」と呼ばれ、芸術家や文人らが集う文化サロンの役割も果たした。

かつて街道沿いを中心に発展した柏の街。住宅街や商店街が広がる今も、その根底には地域で育まれた豊かな文化が息づいているようだ。(長谷裕太)

このコーナーの感想をお寄せください。編集後記で紹介する場合もあります。掲載可能ならば、住所、名前がペンネームを併記してください。〒100-8055 (住所不要) 読売新聞地方部「アウトドア体験隊」係。メールはnaishin@yomiuri.co.jp

12月6日に、黄葉した銀杏と、花が咲いていた椿に囲まれた「原っぱ」を撮影してきました。



★Y0-ENさんの茶の花忌でのライブ演奏、You-tubeにアップされる！

今年も茶の花忌でライブ演奏して下さったY0-ENさんの動画がYou-tubeにアップされました。ご覧下さい。重吉詩のPRにもなって感謝です。

<https://www.youtube.com/watch?v=gIsVOAiBiCY>

ライブ演奏と同時並行して実施されていた散策グループが、生家の裏山を登って江柄神社を訪れていたところ、Y0-ENさんの歌が裏山の上まで響き渡って来て、緑の自然の中でのライブを味わっている気がしました。



★蟲の詩碑がある茅ヶ崎からの便り

○茅ヶ崎八木重吉詩碑建立19年記念日の集い報告 左側後ろ亀井 右後ろ川井夫人→
・亀井瑞世さんより 左側前太田 右前川井盛次氏→

19年前の詩碑建立記念日の10月2日は、まるで夏日のように暑い日でした。今年も19年前を思い出すような猛暑のなごりの秋日。参加者は茅ヶ崎八木重吉の会代表の川井盛次先生ご夫妻と太田きよ子さんと亀井の4人。いつものように、詩碑「蟲」の歌（建立記念に吉田孝古麿氏が作曲）を皆で歌い、各人が思い思いの重吉詩を朗読しました。私は、この夏に読んだ「中村哲 思索と行動 上下」（忘羊社）の上巻の冒頭、準備号（1983・3）の次に置かれた、ペシャワール会会報1号（1983・12）「ペシャワール会会員の皆様へ！」ロンドンより一の文章の最後に、何と八木重吉の詩が引用されているのを読み、とても感動し、その詩を朗読したのです。



中村哲氏の引用には記憶違いがあったと、編集者の訂正の詩が記載されていましたが、私は、中村哲氏の記憶違いによる八木重吉の詩を読んで、ペシャワール会を発足させる時に、中村医師にどれほど勇気を与えていたか！と感じたので、その両方を皆様に読んで頂きたく、その両方を記載いたします。

詩は、重吉詩稿「ことば」（対象14年7月7日編）の〈断章〉です。

中村哲氏引用の詩は ↓

もえなければ かがやかない。
かがやかなければ
せかいはうつくしくない。
わたしがもえなければ
あたりはうつくしくない。

筑摩文庫の八木重吉全詩集2の詩は ↓

もえなければ
かがやかない
かがやかなければ
あたりはうつくしくはない
わたしが死ななければ
せかいはうつくしくはない

「ジャララバード」美（は）しき響きよ 中村哲医師凶弾に撃たるる地の名哀しき（瑞世）

・太田きよ子さんより

10月2日、茅ヶ崎の詩碑「蟲」の前で、今年も集いがありました。平成17年11月初旬に建立されたのを記念して、毎年初旬に集っています。今年は川井盛次夫妻、亀井、太田の4人で、いつも通り好きな詩を読み、建立時に発表された「蟲」の歌を合唱して近況を話し合いました。車イスの川井さんはお元気で。また今年は集まれなかった吉住裕子さんからは、詩碑のついでに俳句が送られて来ました。

重吉の詩碑に寄り添う秋の蝶

（詩碑の前での集いの時、たいてい蝶が飛んで来て、集いが終る頃に去ってゆく様を歌ったとのこと）